[文献解題]

さまざまな分野における「一貫性」研究

高梨 克也

談話における「一貫性」についての研究は談話分析に止まらず、他の隣接諸領域においても広く行われてきた。この文献解題の目的は、こうした多様な視点からの一貫性研究を概観することである。以下、→の段落は文献解題著者によるやや主観的な見解である。

DISCOURSE ANALYSIS

ここに分類した各領域のうち、「談話分析」と呼ばれる領域は圧倒的に広範かつ多様である。従って、私見により、この名前で呼ばれる領域を以下のように下位区分しておく。ただし、この区分はあくまで便宜的なものであり、もとよりこのような区分が完全に排他的に可能であると主張する意図はない。

談話分析の下位区分

＊言語学的：

1. テクスト言語学的－主に書かれたテクストの静態的構造を考察する。Mann&Thompson(1986,1988) など。
2. 心理言語学的－主にテクスト理解の際の心的処理過程を重視する。Sanders, Spooren&Noordman(1992,1993)、Gernsbacher&Givón(1995)、Rickheit&Strohner(1992) など。
3. 機能言語学的－ Coulthard らのバーミンガム学派が代表的。Halliday らの機能言語学に基づくところが大きい。以下の紹介文献の中では、Tsui (1990) はこの立場に比較的近い。

   ＊なお、１と２の距離は狭まりつつあると思われる。

＊社会学的：主な思想的源泉はFoucaultなどのフランス現代哲学及びエスノメソドロジーにある。「談話」という訳語より「言説」の方が的確かも知れない。従来の会話分析よりも哲学・心理学的な理論的含意や社会学的な主題に対する帰結を重視する。イギリスの社会的構築主義や近年のLoughborough大学のDiscourse and Rhetoric Groupなども含む。なお、この立場から一貫性について考察している文献は今のところ見当たらない。

Gernsbacher,M.A.&Givón,T. (eds.) 1995.
***Coherence in Spontaneous Text.* John Benjamins.**

本書に収蔵されている諸論考に共通する立場を一言でいえば、一貫性は産物としての静態的なテクストに内在する特性ではなく、スピーチの産出や理解の際に現れる、心的に表象されたテクストや、特にこうした心的表象を構成するのに必要な心的過程の持つ動態的特性である、となる。これは、上述の言語学的談話分析の分類に従えば、1の立場を批判して2の立場を鮮明に掲げたものであるといえる。各論考が対象としているテクストは、書かれた物語テクストから地図課題遂行中のより実験的な二者間対話、さらにはより自然な日常会話までさまざまであり、それぞれの主張の焦点も、テクスト世界内の事象に関する体系的背景知識を利用するトップダウン的理解、指示対象の決定や共有知識をめぐる対話者の共同作業(collaboration)過程、会話の相互作用レベルでの構造の強調など、多様であるが、テクストに一貫性が見出されるようになる認知処理過程の解明を目指していることにおいては、大枠の一致を見る。
→　しかし、総体的にいえば、一貫性理解の際の認知プロセスに各テクスト部分の相互行為的機能についての理解がどのように関わっているかという観点を欠いている論考が多いため、ここでの談話理解の認知プロセスの解明は一面的なものにとどまっていると感じられる。

Givón,T. 1995.
Coherence in text vs. coherence in mind.
(in Gernsbacher,M.A.&Givón,T.(eds.) *Coherence in Spontaneous Text.* John Benjamins.)

一貫性はテクスト自体の持つ特性ではなく、テクストを産出・解釈する心の特性であ

る、という本書の主題の骨格を示しており、一貫性の理解には領域固有的な語彙的知識と文法処理上の手がかりの両者に基づく処理が同時並行的に必要であることを概観している。

Trabasso,T.,Suh,S.&Payton,P. 1995.
Explanatory coherence in understanding and talking about events.
(in Gernsbacher,M.A.&Givón,T.(eds.) *Coherence in Spontaneous Text.* John Benjamins.)

物語理解についての研究室実験によって、物語の大局的理解の際に、読者が登場人物の一連の行為をその目標と関連づけて階層的なプランを構築することの有効性を示している。言い換えれば、物語理解が成功するためには読者の心内において活性化される背景知識を利用するトップダウン的過程が必要であることを明らかにしている。
→　しかし、物語の相互行為上の役割に関する視点を欠いているため、物語と他の談話部分との間の一貫性については考察できない。

Sanders,T.J.M.,Spooren,W.P.M.&Noordman,L.G.M. 1993.
Coherence relations in a cognitive theory of discourse representation.
***Cognitive Linguistics*, 4(2): 93–133.**

Sanders,T.J.M.,Spooren,W.P.M.&Noordman,L.G.M. 1992.
Toward a taxonomy of coherence relations.
***Discourse Processes*, 15: 1–35.**

一貫性関係は談話の理解と産出の両方において中心的な役割を果たす認知的実体であり、談話を理解するということは当該のテクストについての一貫性のある表象を構築することであると考えている。一貫性関係の分類は記述的適切性のみならず、心理学的妥当性をも有するものでなければならないが、先行研究の中には記述的に妥当な提案はいくつかあるものの、心理学的に妥当な理論は存在しないと主張し、原因-帰結や主張-根拠などのさまざまな一貫性関係を、因果的/付加的関係、意味論的/語用論的関係、単位間の基本的/非基本的順序、関係の極性（肯定的/否定的）という、認知的に顕著な四つの原基 (primitives) の組み合わせによって説明・分類し、その分類を実験によって裏付けている。

→　しかし、ここで提唱された四つの原基が談話の産出や理解の際の認知プロセスにおいて具体的にどのように用いられているかが明示されていないため、真に認知的研究であるとはいえず、従来の記述的な分類をこれらの原基によって事後的に位置づけなおしたものであるとも見られ得る。

Mann,W.C.&Thompson,S.A. 1988.
Rhetorical structure theory: Toward a functional theory of text organization.
***Text*, 8(3): 243–281.**

Mann,W.C.&Thompson,S.A. 1986.
Relational propositions in discourse.
***Discourse Processes*, 9: 57–90.**

テクスト内の文あるいは節の間の関係を両者を結びつける関係的命題（あるいは述語）という観点から分類した記述的理論である修辞構造理論 (RST) を提唱している。
→　記述的分類としての有効性は広く認められているが、一貫性関係の分類基準が明確でないため、さまざまなレベルでの一貫性関係が区別なく混在しているように思われる。また、談話単位間の関係を関係的命題として扱っている点に関しても、近年の語用論的分析からは疑問を呈されている。

Rickheit,G.&Strohner,H.1992.
Toward a cognitive theory of linguistic coherence.
***Theoretical Linguistics*, 18(2/3): 209–237.**

言語学的一貫性をより抽象的な認知的一貫性という概念によって基礎づけることを試みており、この概念のもとに知識構造の持つ構造的・全体論的・創造的側面を考察している。さらに、認知システムが言語的一貫性についてのさまざまな問題を推論方略を用いて解決する際の方略のいくつかを例示し、これを上記の理論的枠組みにおいて検討している。
→　従来の一貫性研究をより抽象的な認知システム一般の特性から解明しようとする試みであるが、言語学的分類に即座に適用可能であるとは思われない。

PRAGMATICS

関連性理論の登場以来、語用論と心理言語学的な談話分析との距離はある観点から見れば近づきつつあるのかもしれない。これは両者が談話や発話の理解の際の推論メカニズムを考察対象としようとしていることによる。しかし反面、談話表象や一貫性関係の心理学的実在性をめぐっては両者の立場は対立しているようにも見える。両立場から仮定される心的表象やこれを用いた推論のメカニズムについての詳細な検討が急がれるが、やや皮肉なことに、以下の Thagard(1989) についての検討の中でも指摘するように、表象の構造と推論（あるいは計算）の過程を積極的に明示してきた人工知能研究者の一部からは、近年、表象や推論についての従来の仮定への深刻な反省が表明されてきているのも確かである。

Unger,C. 1996.
The scope of discourse connectives: Implications for discourse organization.
***Journal of Linguistics*, 32: 403–438.**

談話連結詞を階層的に組織された談話単位の間の一貫性関係の標識として扱う従来の見解を批判し、そもそも一貫性関係を認知的に実在する実体であると見なすことはできないと主張している。テクストを構成・理解する際の原理は関連性の原則であり、一貫性は関連性の原則に適合する解釈を追求した結果として現れる副産物に過ぎない。
→ しかし、先行研究に対する批判には妥当な点が多いものの、テクストの構造化の原理を関連性の原則に全面的に依存するものと見なす一方で、その際の具体的な推論プロセスが明示されていないため、関連性理論の信奉者以外にとっては説得的ではない。

Blakemore,D. 1997.
Restatement and exemplification: A relevance theoretic reassessment of elaboration.
***Pragmatics and Cognition*, 5(1): 1–19.**

関連性理論の枠組みに基づき、従来「精緻化」という一貫性関係のラベルの下に一括されてきたいわゆる言い換え現象の中には実際には混在性が存在していることを指摘

している。精緻化についての従来の研究が専ら記述内容の意味論的な関係に基づく、静態的記述的分類に止まっていたことに対して、こうした関係は関連性の原則と合致する解釈を求めるという、発話理解の際の認知プロセスの観点から考察されなければならないことを主張している。

CONVERSATION ANALYSIS

談話分析や語用論における近年の傾向とは対照的に、会話分析には会話参与者の心的過程についての仮定を積極的に禁じてきた側面がある。こうした態度にはそれなりの根拠があるというのも事実だが、逆にこの点が他の領域から見た場合の会話分析に特有の「分かりにくさ」や「疑わしさ」の一因となっているというのもまた事実であろう（これは事実の指摘であって、批判ではない)。会話分析の知見に基づいて一貫性についての従来の分類を再考するならば、一貫性という性質（あるいは印象）は会話に含まれるかなり多様なレベルでの関係の相互依存的複合体であることが明らかになるはずである。しかし、会話分析が強調する会話の連鎖性を、認知科学的に説得力のある方法で一貫性を支える他のレベルの関係と結びつけるための方法論は、残念ながら現在の会話分析の内部からは生じそうにない。

Tsui,A.B.M. 1991.
Sequencing rules and coherence in discourse.
***Journal of Pragmatics*, 15: 111–129.**

会話の組織的構造が形成される際の連鎖規則を検討している。Levinson(1983) は当該の発話行為の発生に続いてある発話行為が起こるという期待を述べる隣接ペアの連鎖規則のようなものを定式化することは不可能であると主張している。しかし、隣接ペアについての規則は「何が実際に現れるか」を述べるものあるよりは、むしろ「何が起こることが期待されるか」を述べるものであり、この規則には会話参与者による逸脱例の認知と対処を説明する記述力があることを示している。さらに、ある発話が先行発話と一貫性のある連鎖を形成するためには、この発話は先行発話の発語内意図を満たすかその語用論的前提を示すものでなければならない、という、「一貫性規則」を提唱している。

Schegloff,E.A. 1990.
On the organization of sequences as a source of 'coherence' in talk-in-interaction.
(in Dorval,B.(ed.) *Conversational Organization and Its Development.* Norwood,NJ: Ablex: 51–77.)

会話に一貫性を生じさせる要因の一つが隣接ペアという会話連鎖構造にあることを例証している。具体的には、要求-受諾という隣接ペアの間に長大な挿入連鎖が介在している会話例をもとに、この会話が言及内容間の主題的関係のレベルでは一貫性を有していないにも関わらず、会話参与者にとっては一貫性のあるものと認知されていることから、隣接ペアという連鎖構造が主題的一貫性とは独立にそれ自体で相互行為的一貫性を形成する力を持っており、主題的一貫性もこうした相互行為レベルでの一貫性の枠内でのみ有効なものとなると主張している。会話参与者にとってと同様、分析者にとっても、発話はまず第一にある連鎖的文脈の中で構築され、連鎖内のある位置を占めるように構築されたものとして理解可能なものである。
→　従来の談話分析における一貫性研究に欠如していた、会話連鎖構造が果たす構成的役割に対する洞察を明確かつ簡潔に示している点できわめて重要である。しかし、逆に、会話分析の立場からの考察においては、発話理解の際の推論という認知的プロセスに関する解明が試みられることはなく、また、隣接ペアを超える会話構造と一貫性との関係についての考察のためには、会話分析における現在までの定式化ではまだ不十分な点が多いと思われる。

ARTIFICIAL INTELLIGENCE

著者の微力の故、この領域からの該当文献は以下の一点の他には選択できなかった。この領域での研究の長所は、一貫性が推論される際の心的処理過程とその際に用いられる心的表象の構造を明示している（当たり前だが）ことである。逆に、その問題点は、単純にいえば、必要であると思われる知識や手続きを予めすべて用意しておかなければ安心できないという独特の心配性と、ある場合には実行可能性のために心理学的妥当性を犠牲にするという傾向にあると思われる。多少領域は異なるが、例えば対話システムの設計において仮定されるような階層的談話プランのようなものには心理学的

実在性があるであろうか。なお、以下の文献は著者が「書評」の欄で取り上げているHaselager(1997) においても詳細に紹介・検討されている。

Thagard,P. 1989.
Explanatory coherence.
***Behavioral and Brain Sciences*, 12: 435–502.**

日常生活における推論と科学的仮説の両方の評価に対して適用可能な説明的一貫性についての計算論的理論を提示する。ここでいう「説明的一貫性」とは、仮説と観察命題の間の関係や観察命題同士の関係における整合性である。この理論は仮説と他の命題との間に局所的一貫性を確立するための七つの原理からなっており、これらの原理をECHOと呼ばれるコネクショニズムのプログラムにおける実行によって実証している。さらに、このプログラムをラヴォワジェやダーウィンなどによる有名な科学的発見の事例や法的な状況での推論に適用するとともに、この理論の持つ人工知能や心理学、哲学の分野に対する含意が主張されている。
→　推論の全体論的性質あるいは整合性という、一貫性の評価の際の重要な課題に正面から取り組んでいる点と、他の領域での研究とは異なり、一貫性の認知的メカニズムについてのモデルを明示している点において評価できる。しかし、コネクショニズムモデルにおいて命題をユニットとすること自体には疑問がある。